

連載 わがまな宝石たち 4 「真夏の夜の夢」

エッセイスト 岩田 裕子



イラスト 岩田 裕子

魔法の森のお話

ルビーの蝶が飛び、サファイアの花びらが震える月明かりを浴びて...

夏至祭りの前夜は、不思議なものたちとの距離が縮まり、あらゆる出来事が起こるのです。

16世紀末、シェイクスピアの作り上げた妖精物語「夏の夜の夢」(原題「A Midsummer Night's Dream」)は、この夏至の前夜をえがいた、コミカルで幻想的なお芝居なのです。

ヨーロッパには、この夜、フェアリーたちが森に集まり、饗宴をはる。という伝説があります。また、当時のイギリスには、その夜、若者たちが森に行き、花輪を作って恋人に贈る風習もあったのです。

シェイクスピアは、子供の頃から慣れ親しんだ妖精伝説や夏至祭りのイメージに、ギリシャ神話のおおらかさを織り混ぜ、この不思議な夢幻劇を作り上げました。

物語の舞台はイギリスから遠く離れた、ギリシャ。アテネ近郊にある魔法の森に、四人の若者が、紛れ込みました。

夜の森は、世界中どこであっても、狂気をふくんでいるものです。神話の国ギリシャの、

まして魔法の森ともなれば、なおさら。この妖気漂う森に集うのは、貴族の子供たち。

親の反対をおしきり、駆け落ちしたハーミアとライサンダー、そのハーミアに夢中のデミトリアス、デミトリアスを愛しているヘレナの四人です。

恋のパズルは、デミトリアスが小柄なハーミアを思い切り、背の高いヘレナに向くだけで、めでたしめでたしとなるのだけど、そうはいかないのが、現実のむずかしさ。

本来、品位を重んじる彼らが、本能のままに愛を求め、恋敵を激しく、口汚いといってもいいほどのしるの、すでに森の魔法に理性を狂わせられてしまっているからに他なりません。

大騒ぎの若者たちを見守っている者がいました。きらびやかな妖精王オベロンと、彼の家来、いたずら好きの妖精パックです。威厳ある妖精王オベロンは、片思いに苦しむヘレナに同情し、花の汁でつくられたほれ薬を、デミトリアスのまぶたに塗るよう家来のパックに命じました。

目覚めたとき、はじめに目にしたものに、夢中になってしまうほれ薬。それは、ギリシャ神話の恋の神キューピッドの矢に射られたすみれの花で、最強の恋の薬草なのです。別名は、浮気草。夏至祭りの前夜である、今宵こそ、もっとも効力を発揮するという。

パックは命令を遂行しました。しかし、塗る相手を間違えた! わざとじゃないよね。いたずら好きの妖精だけに、疑ってしまうのですが... 恋はますます大混乱。

一方、妖精界も大騒ぎ。美しい妖精女王タイターニアもまた、喧嘩中の夫オベロンの策略により、すみれのひとしずくを塗られたのです。タイターニアがひとめぼれしたのは、ロバの頭の怪物!

ほれ薬の魔法をといた解毒剤は、恋愛嫌いの月の女神ダイアナの花のしずくでした。

あまり個性のはっきりしない人間の若者たちとは対照的に、妖精たちは魅力的です。

威厳があり、ときどきやさしいけれど、いつもは残酷な妖精王オベロン、高慢ちきな恋多き女王タイターニア。野育ちで陽気なパックは、地球を40分で一回りするほどすばしこいのが特徴。いたずらばかりしている悪い子だけど、大事なところでは、人間に幸せを運ぶのです。

彼らの妖精宮廷には、小さな生き物の化身である妖精たちがいて、その名もからし、蜘蛛の巣、豆の花。主人たちの御用をしたり、輪になって踊ったりして楽しく暮らしているのです。

それにしても、この物語はさまざまな魔法にいろどられています。

夜の魔法、森の魔法、花の魔法。そして、宝石の魔法。

シェイクスピアは、実は宝石使いの名手で、「夏の夜の夢」も、その例にもれず、黄色い桜草の花びらの赤い斑点をルビーにたとえ、「ヘレナの瞳は水晶よりもすきとおっている」と、彼女への恋にめざめた、デミトリアスに賞賛させているのです。一方のヘレナは、念願かなって、自分のものになったデミトリアスを、「まるで拾い物の宝石のよう」と、この夢のような幸せを喜びました。

妖精女王タイターニアはといえば、かりそめの恋人、ロバの頭をかぶったボトムに「お望みならば、深い海のそこから、真珠をとってこさせましょう」と、最大限の愛を誓います。時はエリザベス朝。かの女王が、夢中で世界中の真珠を愛していたころ。このころの真珠は、まさに奇跡の産物で、妖精女王が、どれほどこのロバ頭にほれこんでいるかをしめす、夢のようなセリフなのです。

月明かりに浮かぶ魔法の森は、それ自体、宝石のような輝きをはなっています。妖精も浮気草も、石にひそんだ内包物のように、森の魅力の小さな秘密なのです。

もしかすると、このお話は、宝石たちが見た他愛もない夢なのかもしれません。いえ、そうではなく、この森自体が、宇宙という広大な宝石箱にしまわれた、世にも美しい、一粒の宝石なのだと思えることもできるのです。

冷たい音楽

妖精について、というわけではないですが、私が一人暮らしを始めたばかりの、ある時期、妖精といっしょに住んでいたことがあ

ります。それはまるで、ティンカーベルをもう10倍、冷たくしたような、すなわちクールな妖精でした。けけ学を専攻した、いわば理系の妖精だったのです。

「音楽にも温度があるのよ」と妖精ジジが言うので、

「どうやって計るの」私は聞きました。「妖精は、背中で温度をはかるの」「ふーん」気温を知りたいと思ったら、音楽を聴きながら、背筋をびんと伸ばす。そうすると、背骨が気温を教えてくれるのですって。

楽器でいえば、バイオリンよりピアノが冷たい。ジャンルならロックよりジャズ。演奏の熱っぽさとは関係ないそうです。

ワーグナーやベートーベンは熱い。エリック・サティ。これは飛びつきり冷たい。『官僚的なソナチネ』『潜水人形』あたりはイギリスの冬クラス。『冷たい夢想』は北欧まで行ってしまおう。『そういえば北欧の海底を正装した紳士が歩く...そんな感じがするわ』

ほのかも納得しました。「サンバは、凍ってしまった炎。ジョアン・ジルベルトの『三月の水』あたりがカチカチに冷たい」「ヘンデルの『水上の音楽』はどう?」

ほのかが聞く中、「あれは、湖の真中に浮かんでるインドのお城の涼しさってことよ」妖精がすまして答えました。「じゃ、いちばん冷たい音楽は?」

それを思い出しただけで、ジジは小さきみにふるえていました。

あの夜、恋人の妖精とふたりで北極の満月を浴びに出かけたのです。ふたりが氷の上で肩をよせていたら、グアーツグアーツとすごい音がして、くじらの群れが浮かびあがりました。なにかの集会なのでしょう。ありとあらゆるクジラがいます。四角い頭のマッコウクジラ、伝説の小説『白鯨』のモデルです。北極住まいのホッキョククジラ、クジラ族のなかで、泳ぐのがいちばん速いクジラです。飛びぬけて大型、身長25メートル、100トンのシロナガスクジラは、まるで客船みたいです。

彼らの合唱が始まりました。グアーツグアーツグアーツ。かわりばんこに潮を吹き、その潮が凍って、まるで氷の柱の林です。クジラはみんな歌が好きなのですが、いちばん歌がとくいなのは、エンターテイナー、ザトウクジラ。人間のバリトン歌手、100人分の迫力でした。

そこに青白い月の光がふりそそぎ、冷たく輝き、巨大なカラダがめめめと黒びかりて...彼らが群れなして、泳ぐところは、まるで惑星たちが接近して、衝突したみたいなの迫力。

寒さとこわさと美しさと、背骨がキンキンに凍ったあの夜。

グアーツグアーツグアーツグアーツ。声をはりあげる鯨の合唱。「あれほど冷たい音楽はなかったわ」ジジが、背中の羽を震わせました。



イラスト 岩田 裕子

真夏の夜の街

天は、螺鈿の青ガラス。草野心平「夜の天」より

ひと気のない大通りに、赤信号がどこまでも続く。次の瞬間、すべて緑に。気がつくとも信号は、点点点、と並んだエメラルドのカケラだった。ピュワーンと音をたてて、ときおり走り去る車。風をうけて、かすかにふるえるポプラ並木。そのどちらもが、ガラスに映った影のごとき、オニキス色のシルエットを浮かびあがらせている。星くずは、金粉。鋭く、幾粒かまたたいている。

気がつくとも、サファイアでおおわれた夜空に、ダイヤモンドの三日月がうかんでいた。か細くて、今にも折れそう。暑さの余韻は消えず、すずしさという薄青の魔法におおわれて。あてどもなく、どこまでも歩いていたい。

なにかもが、夜はきれい。



岩田 裕子 (いわた ひろこ)

「宝石とは、美しさ、そして夢」と考え、様々なキーワードでギリシャ神話から名探偵ポワロ、パレエや競馬、ピーターパン、王女さまに魔術まで一を駆使して、宝石の魅力を解き明かしている。慶應義塾大学西洋史学科卒業後、編集者を経て、エッセイストに。宝石に関する著書は、「夢見るジュエリ」「ダイヤモンドAtoZ」(共に東京書籍)、「宝石物語」(大和書房)、「21世紀の冷たいジュエリ」(柏書房松原)、「恋するジュエリー スターが愛した宝石たち」(河出書房新社)など。ほかに、妖精、花の本、絵本の翻訳、ショートストーリーの執筆も。文章にあわせ、イラストも描いている。新しいホームページを立ち上げました。http://www.shinjukutoyama.com/pag_e1.php